

学ぶ子どもの願いを受け止めて —特別支援学級の算数—

埼玉県・公立小学校教員
中村 潤

「ぼくもできるようになりたい！」

「ぼくも一人で読めるようになりたい。お母さん、仕事で疲れていて大変だからさ」特別支援学級の教室で、きらと君（小4）がお気に入りの絵本『おまえうまそうだな』（宮西達也作）を眺めながらポツリと言った。普段、教師の言葉を見たり聞いたりしながら、ひらがなの読み・書きをしている。ひらがなの「あ」の場合、「あべ先生の『あ』と呟く。自分が知っている言葉とひらがなを結びつけて表現している様子だった。

ゆうと君（小4）は、3年生から特別支援学級に入級した。指示や説明に納得できないと、「なんで授業が変わるの？」やろうと思っていたんだよ」など早口で言い返す。行動のパターンがあるようで、急な予定の変更や新しいことに不安を感じやすい。言動の理由を聞いても、目線は合わずにはっきりとした答えは返ってこない。4月の面談では、母親から最近家でもイライラしている様子、自分の気持ちをなかなか言い出せないことが課題と聞いた。うまくできないこと、不安をきつと抱えているに違いはないと感じた。ある日、焦りから苛立つ様子だったので、理由を聞いてみた。

「焦っちゃうんだよ。早口で言われると」と言った。焦りの中から「わかるう」「うまくやろう」とする気持ちが垣間見えた。

「やりたくない！」「行きたくない！」と自分の考えを譲れないかい君（小6）。身体を動かすのが好きで、他のことがつい気になってしまいうあおと君（小3）がいる。私が担任する特別支援学級（知的）では、4人の子どもたちが生活している。今回は、きらと君とゆうと君の算数の学びに焦点を当てた実践である。

たし算を問題づくりで

きらと君は、3年生のときに「2桁のたし算・ひき算」をしていたが、難しそうだったことを支援員から聞いた。そこで、1桁の計算からやってみることにした。指を折って、繰り上がりのない $3+2$ や $5+2$ などのたし算や繰り下がりのないひき算を計算していた。タイルやブロックを使うように勧めると、少しずつ自力で解ける問題が出てきた。

繰り上がりのある計算になった。「どんぐりを9こひろいました。また4こひろいました。どんぐりはぜんぶで何こですか」という問題。「1、2、3…9」と9個のブ

ロックを数えながら置き、さらに4個のブロックを置いた。「1、2、3…」と再び数えて、全部の数は13個となり、13と答えを書いた。ところが、この方法である問題が起きた。たし算をするうちに、数え間違えが起こりやすく、9+4の場合で言えば14や15と答えることがあった。そこで、「10個集まったら『マテマーク』と変身させてから11、12…とやってみたら？」と提案した。きらと君は、10をまとめると「11、12、13。早いね。先生、頭いいじゃん」と言った。問題をこなすうちに、計算間違いの数も減ってきた。全問正解というときもあった。

ある日、きらと君が「オレも作ってみたい！」と言った。以前、かけ算の学習でゆくと君が作った問題をクラスで紹介したことがあった。そのことを覚えていたのかもしれない。「じゃあ、やってみよう！」ときらと君の要求を聞き、好きなものでも考えてみるように伝えた。きらと君が作った問題は、次のようなものである。

いのしし6とう。あとから7とう。
ぜんぶでいくつですか。

「イノシシにする」書きたいものが決まり、すらすらと鉛筆が動く。アニメ『鬼滅

いのしし6とう。あとから7とう。ぜんぶでいくつですか。



ぜんぶでいくつですか。

の刃』の善逸や伊之助が好きなきらと君らしい問題だ。絵を描くのが得意で、特徴をよく捉えている。問題を見たあおと君は、

「きらと君、絵うまっ！」と驚いた。問題を解いたあおと君に「正解！」と答えるきらと君から満面の笑みがこぼれていた。
2学期になり、ブロックやタイルを使いながら2けたのたし算の筆算に取り組んだ。繰り上がりのない計算であれば、一人で答えまで求められるようになった。「できたよ！」「簡単だったよ」と学習に対する自信も出てきた。

わり算で見つけた「変身！」

8÷4の1桁のわり算、80÷4の何十の数のわり算から学習を始めた。ゆうと君は、「4×2=8だから」と理由を説明した。88÷4の問題になると、初めての数のわり算に、「えっ…」と困惑した。タイルを使って答えを求めてもいいことにして、机の上でタイルを差し出した。すると、タイルを手に取り、十のタイルを4つの皿に2本ずつ分け、一の位を1個ずつ分けた。「答えはどうなった？」と聞くと、「22」と答えた。理由を聞くと、次のように説明した。

「まず、十を分けたら2個ずつになって、次に一を分けたら2個ずつになった。だから22」なかなか自分から言い出せないゆうと君にとって大きな一歩だと感じ、説明を

ノートに書き留めるように伝えた。

次に、 $72 \div 3$ になる問題を出した。 $84 \div 4$ と同じように十のタイルを配り始めた。2本ずつ配り終えたところで手が止まった。十のタイルが1本余ってしまったのだ。「どうしよう。配れないよ!」と戸惑うゆうと君に、「じゃあ、このままでいい? 他に配れる方法はないかな?」と私は問いかけた。すると、「1に変身する」と答えた。タイルを変身させる時のおまじない「マテマータ」を教えた。十のタイルを一のタイル10個に変身させ、あわせて12個になった。 $12 \div 3$ をして一の位は4になった。前の問題と同様にやり方をノートに書いた。余った十のタイルを一のタイルに「変しん!」と書いた。「1」の中には、ゆうと君の「マテマータ」と変身させる動作を発見した驚きが込められている気がした。

2学期になり、3桁のわり算の学習にもつながった。タイルを使い、どうやって計算すればよいか考えた。大きい数(百のタイル)から分けること、余った十のタイルを一のタイルに変身させればよいということを発表し、筆算でも計算することができた。言葉や数の操作だけでなく、実感の伴う「半具体物の操作」をくぐる必要があると感じた。



株式会社ハピラ 分数入門パズル

2022年6月29日

https://www.hpl.co.jp/wp/wp-content/uploads/2022/06/R_KIDS02.pdf

学校で、角を見つけた!

ゆうと君ときらと君と一緒に学習できる場面はないかと考えていたとき、角の大きさの学習になった。「これだ!」と思い、学習を始めることにした。

ゆうと君は全円分度器、きらと君は教科書の巻末に付いている2枚の円を使った。おもちゃのピザ(分数入門パズル)をじゃんけんして勝ったら1枚取る「ピザとりっこ

ゲーム」。最後に、取ったピザの開き具合を調べる。ゆうと君は分度器で測り、らいき君は2枚の円とピザを同じ形にするようにした。

まず、2等分された(1/2)ピザ。2人で1枚ずつ取った。取ったピザの開き具合は、どちらも同じになり、ゆうと君が角度を測ると180度だった。3等分(1/3)、4等分(1/4)と続けた。

「きらと君、グーしか出さないよ」ニンマリとして言ったゆうと君。私はきらと

君にこっそりチョキのポーズを見せた。チョキを出してゆうと君に勝った。6等分(1/6)のピザは、きらと君が4枚、ゆうと君が2枚となった。ゆうと君の角度を測ると120度になった。その後も勝つと「よしっ!」という弾んだ声が聞こえてきた。ピザを見せ、2枚に分けられたものと8枚に分けられたものではどちらの角度が大きいか聞いた。「こっち!」と2人とも2等分の方を指差した。きらと君は「ピザをたくさんとすると、みどりがおおくなる」とノートに書いた。

次の時間、分度器をもって学校にある角を探検しに行くことにし、角を見つけれそうな場所を聞いた。「体育館にあるんじゃないかな? 僕、見たことあるよ」きらと君の言葉に、ゆうと君も「じゃあ、体育館に行こう」と賛成した。「ちよっと待って」きらと君が円に何かを書き始めた。円に目

盛りを付けたのだ。1、2、3...と90度が9、180度が18となるように書いていた。ゆうと君の使っていた分度器を見て、目盛りを付けたくなったのかもしれない。

体育館に入ると、早速「ほら、あった!」と声をあげたゆうと君。何を指しているのかよくわからず、「何のこと?」と聞いた。「ステージのところ」ゆうと君が作った円、ステージと床を見比べると確かに180度の直線の模様に見えた。倉庫に向かうと、「これかな?」とボールの入ったカゴに走っていった。バスケットボールを取り出したきらと君だが、「こんな感じ!」とボールの模様と円の形がうまく同じようにならず苦戦していた。「うまくいかなそうだね。どうしてだろう? 分度器とボールで違うのかな?」それを聞いたゆうと君が言った。「だって、ボールの線は曲がっているからだよ」「そっかあ」きらと君がその言葉に

納得したようだった。ゆうと君は、直線模様になっっているボールを見つけ、「180度だ」とすぐさま言った。続いて、校内を探検し、階段の模様や壁、図書室の絵本の模様、理科室のフラスコにも分度器で表せる形があるのを見つけた。図工室にある色の表の円にも角を見つけた。「これ、似ている気がする」ゆうと君が測ると180度、きらと君の分度器で測ると18になった。教室に戻っても、「まだないかな?」と探し続ける2人。「ここにもあるじゃん!」見つけたのはゆうと君。指差したのは、温湿度計だった。温度と湿度を2つの針で示し、その開き具合が角度だと説明した。測ってみると、240度だった。たぐさんの場所で角度を見つけ、「楽しかった」と言った2人。教師の想像を超えて、身のまわりに角度があることを発見した。

(登場した子どもの名前は仮名である)

生徒参加による 「人間向陽高校をよくする会」の 取り組み

埼玉県立人間向陽高校 矢吹久美子

はじめに

人間向陽高校では、学校評価懇話会を「人間向陽高校をよくする会」と呼んでいる(以下「よくする会」)。生徒代表7名とPTA会長、副会長、後援会会長、人間市教育研究所所長、学識経験者2名及び校長、教頭、事務長、関係分掌代表(教務部、生徒指導部、生徒会部、進路部、渉外部)、評価運営委員等教職員(公募枠2名含む)で構成されている。年間2回(7月と1月)学校自己評価システムシートの作成後に意見交換の場として設定している。

自己評価システムシートは、めざす学校像「『ひたむきに、おおらかに、たくましく』未来を生き抜く心身とともに健全な若人の育成」をもとに、重点目標である、授業改善や生活習慣の確立、進路実現、協力支援体制の確立などを毎年、各分掌でシートにまとめ、学校全体を通じて取り組んでいくものである。「よくする会」は、「懇話会は、意見交換により相互理解と協力・信頼関係を深める場であり、何かを決定する場ではない。個人の人権に配慮した運営を行う」という原則で運営している。

当日は特に生徒会と評価運営委員会の共

同で作成している「生徒要望アンケート」(16年連続実施)の集計結果・分析を基にした生徒代表の意見表明と教員側の回答、PTA等学校評議員のそれに対する意見交換を中心とした運営としている。また、探究的に行うクラス討議を経て各クラスからの意見をクラス代表として中央委員が発言する。司会進行は管理職ではなく、評価運営委員が担当している。出された意見は学校関係者評価として自己評価システムシートにまとめ、職員会議報告、生徒会ニュース(紙に印刷して全校生徒配布)、PTA広報でそれぞれに還元している。

「よくする会」に取り組む意味

(1) 生徒会の成長につなげるために

生徒要望アンケート(向陽の魅力、向陽に求めるもの、行事への意気込み、授業、施設、その他要望等)を全校生徒より回収し、集計結果に基づき、4つのテーマで意見を表明する。意見が共感できる時は、共感するし、違う時は意見を言う。結論を求めない。生徒自身の自信と成長に繋がる。具体的には、「施設・設備の改善へ」「授業への要望」「制服や生徒指導等への意見」「進路指導について」の4つのテーマを設定している。

(2) PTAとの信頼関係を

深めるために

保護者も生徒会の意見表明と学校の回答を受けて発言。「なまの高校生」の意見を聞くことに保護者として感動するという。つまり、自分の子どもとは、よくコミュニケーションがとれなくても生徒と話し合うことで「安心感」を持つようだ。PTA組織としても、学校参加のあり方が大きく変化し、「子ども理解」を観点とする取り組みが戻ってきている。一昨年度からは学校自己評価の参考とするために保護者アンケートを実施し、保護者の教育活動に関する理解を深め、協力と信頼関係を創ることをめざしている。

(3) 生徒の要望と

噛み合った学校づくりのために

①生徒の意見表明・活動報告からリアルな学校の実際の場面がよく見えてくる。生徒たちが頑張っている姿、向陽高校に求めているもの、それぞれが抱えている課題・問題点も浮かび上がってくる。学校の全体像について肯定的に共有・共感できる場となっている。

②生徒たちにとっては、生徒会活動の報告、授業や進路、生活指導面について考

える機会となり、大人に混じって意見表明することが、自己成長の場となっている。生徒たちは、「よくする会」での意見交換で「的確に褒められる」ことを期待しつつ、発言している。また、クラス代表として意見を発言する中央委員はアンケートに基づいたクラス討議の意見を発言することに意義を見出している。

③教員側からは、指導が必ずしも理解されていないことも明らかになるが、ズレている部分について意見交換することで理解を深める場となっている。その一方で、より生徒の実態に基づくよう指導を修正することを考える情報となっている。

④PTA、学識経験者等については、それぞれの経験から大人としての意見を生徒に直に伝え、時には褒め、時には嗜め、そして激励する発言を行っている。生徒の生の活動報告や意見・感じ方を受け止めることで学校が生徒を多面的に成長させる場であることが伝わっている。

⑤なかなか、結論がでないため、同じ議論を毎年繰り返しているように思いがちであるが、毎年変わる生徒と保護者と意見交換をすることでお互いに考えを深め、学んでいくことに意味がある。また、「生徒の現状が変わらない」ことを確認する

ことが、学校の現状をリアルに掴むために重要な意味があると思われる。子ども基本法に基づく意見表明であることも全職員での確認が必要となってくる。

⑥職員間で生徒の指導や教育方針を考える際に、教員の一方的な管理主義ではなく、生徒の実態に根ざした方針・指導方法を検討していく材料となっている。そのため、生徒の要望は、学校の教育活動に影響を及ぼしている。

⑦生徒・父母参加は、双方向性の意見交換の場を持つことで学びあうことを通して学校の合意づくりに活かされている。

⑧人間向陽高校を「よくする会」で話し合われた内容は、学校関係者評価として学校自己評価システムシートにまとめられ、次年度の学校自己評価システムシートに活かしている。

具体的な準備

(1) 生徒要望アンケートの

作成・集計・分析

当日の意見交換の基礎資料とするとともにその分析を生徒の実情に対する教職員の共通理解の基礎としている。傾向の変化を知るため16年間ほぼ同じもので行い、集計・

分析結果は、職員会議で全体に報告され、企画委員会等の議論の資料にも使用している。

(2) 生徒意見表明にかかわる

支援と指導

「よくする会」の意見表明にあたり、生徒会本部では、論点整理を基に準備を行い、模擬討論を行っている。こうしたことを準備として積み上げることで生徒が発言できるハードルを低くすることが生徒参加を実質的に保障するためには大切なことである。アンケートの集計・分析結果を「よくする会」の前に各クラスに中央委員会を通して提示し、総合的な探究の時間にクラス討議を行い、その意見を「よくする会」当日、中央委員が発言している。クラス討議を通してアンケート結果がクラスに還元される仕組みとなっている。また、「よくする会」の発言については、生徒会ニュースが発行されている。

(3) PTAとの関係

PTAとしても、「よくする会」の内容をPTA役員会等で報告している。PTA役員は、自分の子どもと同世代の意見を聞くことが新鮮で、生徒の考え方については、理解と支援をしたいという発言が多い。

生徒会 NEWS 2024

2024.3.18(月) 生徒会

<2024年2月8日に行われた入間向陽高校をよくする会について>

職員 8名 学校評議員 7名 生徒会役員 21名 中央委員 16名 以上 52名

今回も事前にクラス討議を行い、多くのクラスから意見が出ました。先日のよくする会の内容を全校生徒の皆さんに報告します。

●施設・設備 2限目の休み時間に購買が販売時間を拡大か?

全校生徒から1月15から16日の2日間で食堂アンケートを開催し、そのデータを元に1月19日に食費と話し合いました。その内容についてお話しさせていただきます。まずは、電子マネー(paypay、PASMO、Suica)を券売機で使えるようにしてほしいという要望についてでは、電子マネーに対応している機種がまだないため開発され次第導入を検討することです。また、豚汁やカレーのルーのみの販売など、サイドメニューの種類を増加してほしいという意見を生徒会から出しましたが、食堂側もそのことについて検討しているそうです。次に、生徒に宣伝するためにSNSの開設をしたほうが効果的なのではという意見については、食堂側も開設を予定しているとのことでした。

次は、購買が良く売れているためにその改善点について話し合いました。多くの生徒から、「購買の販売している場所が1カ所だけで早い者勝ちになってしまい、購入できない人が多く、さらに限られた時間での販売なので移動教室などで購入できない人がいる。」という問題が挙げられています。購買側の意見としては食堂の従業員さんたちは基本3から4人体制なので2カ所同時の販売は人手や人件費の問題で難しいのですが、2時間目の休み時間などに唐揚げやポテトなどの簡易的なものなら販売可能とのことでした。そのため、2時間目の休み時間に購買が活動できるような場所を確保してくれたら、より快適に購入することが出来ると思います。学校としても2時間目の販売についての規制は特にはないと答えていただきました。次に、自販機の件についてです。こちらは以前から多くの意見を頂いており、その中でも「菓子パンやお菓子、アイスの自販機を外において欲しい」という意見が大多数を占めていました。今まで置くことが出来なかった理由としては、自販機の置くスペースの確保と電気代の問題、ホイ捨ての問題があるので学校の許可がなければ設置可能です。この点についても学校として設置できるよう検討をお願いします。次に、施設設備の意見についてお話しさせていただきます。まず、体育館についてです。体育館のステージ上のライト(シーリングライトとサスペンションライト)と網棚が壊れてしまっているので修理をお願いします。次に、エアコンについてです。文化祭準備などの長期休みで担任の先生ではなく学年の先生に許可を得ることで許可をしてほしいと意見をだしました。最後に冷水器についてです。今年度の夏の暑さが異常だったためか、一部の生徒から冷水器の導入をしてほしいとの要望を受けました。

<中央委員>

3Fの西側に自動販売機を置いて欲しい、こちらで調べたところ3Fまで運べる道具を使っている乗者もいました。場所が限られているので不便です。(2-3)

<事務員>

2時間目に販売することに規制はない。自動販売機の設置場所は、食堂の敷地の範囲内で可能。エアコンは、担任でなくとも学年の先生であればOK。網棚は修理したい。シーリングライト、冷水器については予算的なものもあるのが難しい。アイスクリームはデザートにあたるので増やす必要があるのか疑問。

<PTA・評議員>

・アイスクリーム、自動販売機については、もっと要望を整理した方がよい。デザートとしてだけでなく暑さ対策として考えられていたのではないかと。

・2-3の中央委員の提案は良かった。具体的に説得力がある。予算については削るところも提案できるとよい。

2024年2月の「よくする会」の様子

生徒会が、食堂アンケートを全校生徒に実施。食堂業者と話し合いを行ったことを報告。豚汁やカレーのルーのみの販売などサイドメニューの種類を増加してほしいと

いう意見を伝えたところ、食堂側もその実施について検討していること、購買コーナーが混雑して購入できない生徒もいることなどを伝えたところ2時間目後の休み時間からあげやポテトなどの簡易的なものなら販売可能とのこと、今年度からの実施が実現した(生徒会NEWS参照)。クラス代表として参加している中央委員

からは、スカート下のジャージを、タイツよりも防寒になるので認めてほしいという意見が出された。しかし生徒指導部からはスカートとジャージの組み合わせは、ジャージは制服ではないためできないと報告された。

また、保護者からもスカート下のジャージは社会的に見ておかしいと意見をいた



「よくする会」の様子

いた。後日生徒会が発行した「生徒会NEWS 2024」ではジャージはやつぱりダメかあと小見出しになっていた。

まとめ

入間向陽高校を「よくする会」の運営は、生徒会活動、PTA活動と連動させることで、双方方向の意見交換を実現している。とりわけ、生徒会本部役員、中央委員の意見表明を大切にすることで「いい雰囲気」となっている。生徒は全校生徒での行事参加の取り組みの意義や課題を見出し、改善に取り組んでいること。また、進路・授業での取り組みむべき課題や反省点を意見表明できている。この意見表明も次年度への進路の期待など積極的な意見も出てきている。生徒食堂や施設などの生活をよくする取り組みへも目を向け、関心を持ち始めている。生徒の要望や実情を受け止め、生徒の自主性を育てることは生徒の成長の基礎となることを合意とする努力が絶えず、求められる。また、子ども基本法に基づく意見表明権があり、生徒の意見を尊重することが大切となっている。そして、この運営をコーディネートする役割が評価運営委員会には求められている。こうしたコー

デインイトが生徒の要望とかみ合う学校づくりに欠かせないものであることについて教職員の間で共通理解を広げることが引き続き必要であろう。

「生徒管理」を強めることで速い「成果」を求める風潮が強くなっているが、そのような状況であるからこそ、生徒の要望（＝実情）とかみ合った学校づくりを進めるために、生徒参加を実質的に保障していく取り組みの意味は大きい。教職員評価における自己評価も自覚的にこうした生徒の実情を踏まえた目標設定、評価としていくことが「競争と管理」の評価とさせないことに繋がるであろう。

※本稿は大月書店刊「クレスコ」2021年10月号に掲載された文章に加筆したものである。